

三菱自動車からみるコンプライアンス

経営学部 経営学科 亀岡ゼミ

B5R11145 堀井駿介

【卒業論文概要】

近年、国内外の自動車業界で不祥事が相次いで発覚している。日本の自動車メーカーも、リコール問題、データ改ざん問題、燃費不正問題、直近では役員報酬に関連する有価証券報告書の虚偽記載容疑など、複数の企業が様々な問題を抱えている。このような不祥事が目立つにつれ、ステークホルダーからの信頼は低下の一途を辿るばかりである。日本経済を牽引してきたモノづくり企業の代表である自動車メーカーで、立て続けに問題が発生するのはなぜなのであろうか。本研究が着目するのは「コンプライアンス」という考え方である。

日本社会でコンプライアンスという言葉が登場したのは、バブル経済が崩壊した 1990 年代初頭であり、当初は「法令遵守」を表す用語として浸透したという。しかし時代とともに、コンプライアンスが持つ意味は多様化し、現代では、企業倫理や内部統制、リスクマネジメントや CSR といったものにまで、用語の持つ意味が拡張しているという。

そこで本稿は、2000 年代からの一連の国内自動車メーカーの不祥事の中でも、もっとも古くくに発覚した三菱自動車のリコール隠し事件を題材に、国内自動車業界の不祥事をコンプライアンスの観点から検討する。三菱自動車は古い歴史を持つ日本の自動車メーカーであり、世界にも名を馳せる大手企業である。しかし同社では、2000 年と 2004 年に相次いでリコール隠しが発覚し、さらには 2016 年に走行抵抗データの改ざんが発覚するという不祥事を起こした。一連の不祥事の結果、三菱自動車は 2016 年に日産自動車の傘下に入ることとなった。

本稿では、書籍や論文を用いて、三菱自動車のリコール隠しがどのような事件であったのか、なぜそのような不祥事が起きてしまったのか、不祥事を受けて、どのような対策が取られたのか、また私たちは事件からどのような反省点を見出せるのかを分析する。三菱自動車の事件をを通じて、国内におけるコンプライアンスの意味と企業の不祥事について考える。